

# 「内面的関係」と「表面的関係」の2側面による 現代青年の友人関係の類型的特徴 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求および充実感からの検討

齊藤茉莉絵\* 藤井恭子\*\*

\*愛知教育大学大学院学生

\*\*学校教育講座(心理学)

## Pattern feature by “Closed friendship” and “Superficial friendship” in Young moderns

Marie SAITO\* and Kyoko FUJII\*\*

\*Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Department of school Education(psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 問題と目的

#### 1. 現代青年の友人関係に関する二面性

青年期の友人関係について、従来「内面的関係」であったものが「表面的関係」なものに変わってきたと指摘されることがこれまで多かった。しかしながら現代においては、どちらか一方の関係だけではなく、両関係が1人の青年の中に同時に成立しているという指摘がなされるようになってきた。そこで本研究は「内面的関係」と「表面的関係」が同時に成立し得るのかを明らかにした上で、同時に成立することが青年の内面にどのような特徴をもたらすのかを明らかにしていく。

そもそもG.S.ホールが青年期を「疾風怒濤の時代」としたことに代表されるように、急激な身体的成長や心理的離乳に直面する青年期は、心身ともに不安定な時期であると以前から指摘されてきた(落合, 1993)。この不安定な時期にいる青年にとって、自分を理解し支えてくれる友人は重要な存在である。岡田(1999)は青年期における友人関係の特徴として、親密で内面を開示するような関係であることを挙げ、これを「内面的関係」という言葉で表した。また「内面的関係」がもつ意義として、不安や悩みを共有することで情緒的な安心感を得られる点、関わりを通して自分の長所・短所に気づき自己を客観的に見つめる機会が得られる点、傷つき傷つけられるという体験を通して人間関係を学べる点の3点が指摘されている(宮下, 1995; 松

井, 1990)。さらに宮下・渡辺(1992)は、女子青年に限定してではあるが、友人との内面的な関わりがアイデンティティの統合と関連することを明らかにしている。これらの指摘は、友人との「内面的関係」なしにして青年は精神的な安定や自己の成長を得られないことを示している。

しかしながら、岡田(1995, 1999)や上野・上瀬・松井・福富(1994)は、現代青年の友人関係は「内面的関係」とは異なった関係であることを明らかにしている。岡田(1995, 1999)は、現代青年の友人関係は表面的で楽しさを追求する群れの同調的な関係であるとし、これを「表面的関係」という言葉で表した。これは友人と深く関わっていきこうとする「内面的関係」とは対を成す関係である。現代青年がこのような友人関係をとる理由として高垣(1988)は、友人からの拒否による傷つき回避をあげている。つまり青年自身は内面的な関わりを望んでいるにもかかわらず、実際にそれを友人に求めるならば馬鹿にされてしまうのではないかという恐れをもっているため、結果的に自分をさらけ出さずことを避け、表面的なかかわりに留まってしまうのだという。同様の指摘は上野他(1994)にもみられる。また「表面的関係」において現代青年は、友人に受け入れてもらうため自分自身を明るく演出する必要があり、この演出が自己不一致感を引き起こしてしまう可能性も示されている(岡田, 2002)。さらに上野他(1994)は、男子において、友人関係が希薄であると、劣等感や問題行動念慮などの精神的な問題を

もちやすいことを明らかにしている。

このように「内面的関係」が青年にとってポジティブな意味で語られることが多いのに対し、「表面的関係」はネガティブな意味で語られることが少なくない。一方で、互いに深入りせずにつきあうことは社会的スキル的一种であり適応であるとするなど(廣實, 2003), 「表面的関係」を評価する指摘もみられる。また青年自身は「内面的関係」と「表面的関係」の両方を友人関係の理想としてとらえていることも明らかになっており(岡田, 1999), 「表面的関係」は「内面的関係」とは異なった意味で青年にとって必要な関係だと考えることができる。つまり、現代における適応的な友人関係とは、ただ単に「内面的関係」であるのではなく、「内面的関係」と「表面的関係」の両方が含まれている関係であるのだと考えられる。これは、岡田(2007)が、特に社会的な適応において「内面的関係」と「表面的関係」を両立させることこそが友人関係の成熟であるとしていることから支持できる。また大谷(2007)が、友人関係を見る新たな視点として「状況に応じた切替」を提唱するなど、近年、青年期の友人関係を複雑にとらえることの必要性も指摘されている。少なくとも「内面的関係」と「表面的関係」という質の異なる2つの関係を同時に見ていくことは、現代青年の友人関係を理解していく上で有用であろう。

## 2. 友人関係に影響を与える欲求

前出の高垣(1988)は、友人からの拒否を恐れる心性、つまり「拒否回避欲求」(菅原, 1986)のために「内面的関係」が抑制され「表面的関係」が促進されるとしている。しかし、もし「内面的関係」と「表面的関係」を同時に成立させるといった現象が起こっているとすれば、この現象に対しての説明がつかない。よって本研究では、「内面的関係」と「表面的関係」が同時に成立しているとき、「拒否回避欲求」がどのような特徴を示しているのかを探索的に明らかにしていく。

「拒否回避欲求」とは、自己呈示の方略を決定づける欲求であり、他者からの否定的な評価を回避しようとする欲求である。菅原(1986)は、この欲求と集団への帰属感と関連についても検討している。結果、この欲求が強いものは個性を殺し周囲と同調することによって集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとする可能性を示唆している。周囲と同調する振る舞いは「表面的関係」の要素であるため、ここからも「拒否回避欲求」は「表面的関係」を促進していると考えられる。また自己呈示の方略を決定づける欲求は「拒否回避欲求」に加え、「賞賛獲得欲求」も挙げられている。「賞賛獲得欲求」とは、他者から肯定的な評価を獲得しようとする欲求である(菅原, 1986)。この欲求が強いものは周囲の雰囲気盛り上げるなど他

者の注目を集めることによって集団の中に自分の居場所を確保しようとするのが示唆されており(菅原, 1986), このような振る舞いも「表面的関係」の要素だと考えることができる。しかしながら「賞賛獲得欲求」についても、「内面的関係」と「表面的関係」を同時に成立させるときのどのような特徴を示すのかは明らかになっていない。

## 3. 充実感をもたらす友人関係

現代における適応的な友人関係が、もし「内面的関係」と「表面的関係」を両立させている関係であるとしたら、このような関係をもつ青年は、どちらか一方の関係のみをもつ青年や両関係とももっていない青年よりも、充実した生活を送っていると考えられる。本研究では、大野(1984)の「充実感」を用いてこの点を明らかにしていく。

大野(1984)による「充実感」とは、Erikson(1950)の提唱したアイデンティティの感覚にもとづいて考えられたものであり、「生活にハリがある」など青年が健康なアイデンティティを統合していく過程で感じられる自己肯定的な、満たされた感覚を指す。またこの「充実感」は、精神的な安定や満たされた感覚に加えアイデンティティの統合状態を推察できる(大野, 1984; 大野・茂垣・三好・内島, 2004)。ゆえに生活感情としての「充実感」だけでなく、自己の成長の程度も類推できる概念となっており、青年が友人関係から得ているものを明らかにするのに適していると考えられる。

## 4. 本研究の目的

以上のように本研究では、現代青年の友人関係において「内面的関係」と「表面的関係」という質の異なる2つの関係が同時に成立し得るのかを明らかにした上で、それらの関係を同時にもつことが青年の内面にどのような特徴をもたらしているのかを、「賞賛獲得欲求」「拒否回避欲求」と「充実感」を使って明らかにしていく。

## 方法

調査協力者 愛知県内にある2つの4年制大学の学生。分析の対象となったのは400名(m = 181, f = 214, 不明 = 5), 平均年齢は20.41歳(SD = 2.43)であった。調査時期 2006年11月

質問紙構成 「内面的関係」と「表面的関係」をとらえるための友人関係尺度: 大学生5名(m = 3, f = 2)へのインタビュー調査と、岡田(1995), 長沼・落合(1998)を参考に「内面的関係」と「表面的関係」を記述する短文を作成し、心理学専攻大学院生・学部生5名によって内容的妥当性を検討した。検討後、さらに心理学専攻の教官1名と筆者によって修正を加えた35項目を「『内面的関係』と『表面的関係』をとらえ

るための友人関係尺度」として採用した。また回答する上ではあらゆる友人関係を思い起こすよう教示し、ある特定の友人に対してではなく現代青年が普段とっている友人関係を広く調査した。回答は「しない」「たまにしている」「だいたいしている」「いつもしている」の4件法で求めた。賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度：小島・太田・菅原（2003）によって作成された賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度18項目を採用した。回答は小島他（2003）にもとづき「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「非常にあてはまる」の5件法で求めた。充実感を測る尺度：大野（1984）によって作成された充実感を測定する尺度36項目を採用した。ただし、この尺度のアイデンティティ達成やそれと深く関わる問題についての感じ方を表す3因子のうち「連帯・孤立因子」だけは値が低いことが、アイデンティティの感覚が高いことを示す。回答は大野（1984）に

もとづき、「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「非常にあてはまる」の5件法で求めた。

結果

1. 「内面的関係」と「表面的関係」からみた友人関係（1）友人関係における二側面の抽出

「内面的関係」と「表面的関係」をとらえるための友人関係尺度35項目について、「しない」を1点、「たまにしている」を2点、「だいたいしている」を3点、「いつもしている」を4点として得点化し、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。4因子から順次因子の数を減らし、2因子解を最適解とした（全分散を説明する割合は37.42%）。得られた因子パターンをTable 1に示す。因子の解釈に用いる項目は.30以上の負荷量をもつことを基準とし、また2つ以上の因子で.30以上の高い負荷量を示した6項目は因子の解釈

Table 1 「内面的関係」と「表面的関係」をとらえるための友人関係尺度の因子パターン

(主因子法, Promax 回転)( $\alpha = .87$ )

項目	f1.	f2.	Mean (SD)
<b>f1. 「内面的関係因子」 (<math>\alpha = .89</math>)</b>			
11. 友だちにあわせようと気をつかっている	.79	-.04	2.44 (0.91)
1. 友だちに本心を打ち明けられる	.74	-.07	1.52 (0.50)
4. 友だちとは互いにありのままを出し合える	.72	.00	2.55 (0.81)
13. 友だちに悩みごとを相談する	.71	.03	2.56 (0.90)
15. 友だちと、互いに頼ったり頼られたりしている	.71	.04	2.74 (0.78)
35. 友だちとは精神的に支えあっている	.70	.07	2.64 (0.80)
31. 友だちとは互いの考えの違いを認め合っている	.68	-.10	2.76 (0.81)
27. 少しぐらい傷つくとしても、友達に本音を語ることができる	.67	-.13	2.39 (0.90)
9. 友だちを信頼してつきあっている	.64	.01	3.04 (0.78)
2. 友だちとはいつも一緒にいなくてもわかりあえる	.63	-.12	2.47 (0.85)
32. 友だちと一緒にいて、成長している自分に気づく	.58	.03	2.54 (0.90)
25. 友だちと違う意見でもきちんと言う	.58	-.23	2.80 (0.79)
29. 友だちとつきあう中で自分を見つめ直す	.49	.13	2.67 (0.84)
16. 友だちと一緒にいると今まで知らなかった自分に気づく	.49	.01	2.53 (0.95)
21. 友だちを理解しようとする	.47	.18	3.07 (0.67)
34. 友だちとは互いに深入りしないようにしている	-.45	.26	2.00 (0.75)
19. 友だちの立場になって考える	.42	.15	2.82 (0.78)
7. 友だちを思いやっている	.39	.24	3.00 (0.72)
28. バカなことを友だちと一緒にあって騒ぐ	.38	.33	2.56 (0.85)
30. 友だちとできるだけ一緒にしようとする	.32	.32	2.53 (0.87)
<b>f2. 「表面的関係因子」 (<math>\alpha = .71</math>)</b>			
10. 友だちと盛り上がるように気をつかっている	.12	.67	2.74 (0.83)
8. 友だちにあわせようと気をつかっている	-.31	.64	2.56 (0.78)
6. 友だちにウケるようなことをよくする	.19	.51	2.46 (0.89)
12. 友だちというその場の楽しい雰囲気（ノリ）を大切にしている	.31	.51	3.03 (0.76)
33. 友だちといるときは空気を読んで、その空気にあつた行動をとる	.00	.50	2.83 (0.78)
3. 友だちに話をあわせる	-.36	.49	2.50 (0.73)
22. 気まずくなるようなことは友だちに言わない	-.29	.48	2.60 (0.84)
24. 友だちとつきあう上で大切にしているのは楽しさだ	.02	.47	2.79 (0.81)
26. 冗談を言って友だちを笑わせる	.27	.46	2.69 (0.87)
14. 笑う・手を叩くなど友だちへのリアクションを大きくとっている	.18	.46	2.58 (0.99)
5. 友だちに誘われたときは、できるだけ応じる	.32	.33	2.90 (0.72)
18. 友だちと違うことはしないようにしている	-.29	.32	1.89 (1.23)
20. 友だちとは流行や当たり障りのない会話が中心だ	-.25	.32	2.06 (0.81)
23. 友だちとは、互いのプライバシーを守るようにしている	.02	.12	2.82 (0.74)
因子間相関	f1		
	f2	.29	

注) 因子負荷量是小数第3位を四捨五入

注)  $\alpha$ 係数は因子の解釈に用いた項目のみを対象に算出

から除外した。

その結果、第1因子は「友だちにあわせようと気をつけている」「友だちに本心を打ち明けられる」など親密で互いの内面を開示しあうような関係を示す18項目に負荷量が高かったため、「内面的関係因子」と名づけた。また第2因子は「友だちと盛り上げられるように気をつけている」「友だちにウケるようなことをよくする」など楽しさを優先した希薄で表面的な関係を示す9項目に負荷量が高かったため、「表面的関係因子」と名づけた。またCronbachの係数を算出したところ、尺度全体では $\alpha = .87$ 、「内面的関係因子」では $\alpha = .89$ 、「表面的関係因子」では $\alpha = .71$ であり、信頼性が認められた。

(2) 友人関係の二側面における類型化

調査協力者ごとに友人関係の各因子の平均点を算出し、これを「内面的関係得点」、「表面的関係得点」とした。全調査協力者を対象に両得点の平均値を算出したところ、「内面的関係得点」の平均は2.64 ( $SD = .50$ )、「表面的関係得点」の平均は2.51 ( $SD = .47$ )であった。「内面的関係得点」と「表面的関係得点」の各点数が平均点より高いか・低いかにより、調査協力者を「内面的関係」高群・低群×「表面的関係」高群・低群の4群に分類した。なお上野他(1994)や橋本(2000)、廣實(2003)を参考に、両関係とも高い群をa.両面群、「表面的関係」のみが高い群をb.表面群、「内面的関係」のみが高い群をc.内面群、両関係とも低い群をd.関係回避群と名づけた。各群の度数をTable 2に示す。<sup>2</sup>検定の結果、人数の偏りがみられ( $\chi^2_{(3)} = 6.56, p < .10$ )、特にa.両面群とd.関係回避群において期待値より高い度数をとっていた。

また調査協力者を性別ごとに分け同様の手続きを行ったところ、男子で人数の偏りがみられ( $\chi^2_{(3)} = 9.73, p < .05$ )、特にa.両面群において期待値より高い度数を、b.表面群とc.表面群において期待値より低い度数をとっていた。なお女子では人数の偏りに差はみられなかった( $\chi^2_{(3)} = 2.00, n.s.$ )。

以上より、現代青年の中には「内面的関係」と「表面的関係」という質の異なる2つの関係を同時に成立させている青年もいることが明らかとなった。さらにa.両面群の青年は期待値よりも人数が多かったことから、2つの関係を同時に成立させることは現代青年にとって特別なことではなく、一般的なことであると考えられた。ただしd.関係回避群の青年も同様に多かった。ここから現代青年には、質の異なる2つの関係を同時に成立させるという複雑な友人関係をもつ青年と、反対にどちらの関係もとらない友人関係に対して回避的な青年という対極的な2タイプの青年が比較的多くいると考えられた。また特に男子においてこのような傾向が強いと考えられた。

2. 友人関係の類型ごとの内面的特徴

(1) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度18項目に対し主因子法・Promax回転による因子分析を行った。結果、小島他(2003)と同様に2因子構造が妥当であることが確認され、各因子に当てはまる項目も一致した(全分散を説明する割合は50.45%)。よって小島他(2003)に準拠し、第1因子を「拒否回避欲求」、第2因子を「賞賛獲得欲求」と名づけた。またCronbachの係数を算出したところ、尺度全体では $\alpha = .84$ 、「賞賛獲得欲求」では $\alpha = .84$ 、「拒否回避欲求」では $\alpha = .89$ という値が得られ、信頼性も確認された。

次に友人関係の4つの群を独立変数、「賞賛獲得欲求」「拒否回避欲求」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、両欲求ともに有意な群間差がみられた(賞賛獲得欲求: $F_{(3,392)} = 14.96, p < .01$ , 拒否回避欲求: $F_{(3,394)} = 10.00, p < .01$ )。Table 3に4群の各得点を示す。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「賞賛獲得欲求」についてはa.両面群 > b.表面群 = c.内面群 > d.関係回避群、「拒否回避欲求」についてはa.両面群 > c.内面群, b.表面群 > c.内面群 = d.関係回避群という結果が得られた。

Table 2 各群の人数

	a. 両面群	b. 表面群	c. 内面群	d. 関係回避群	計
	内面的関係得点H	内面的関係得点L	内面的関係得点H	内面的関係得点L	
	表面的関係得点H	表面的関係得点H	表面的関係得点L	表面的関係得点L	
実際度数	110	81	90	110	391
	(59,51)	(34,47)	(35,55)	(49,61)	(177,214)

注) カッコの中は性ごと (m, f) の値。

Table 3 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の平均値と標準偏差

		a. 両面群	b. 表面群	c. 内面群	d. 関係回避群
賞賛獲得欲求	Mean(SD)	3.34(0.62)	3.11(0.66)	3.11(0.70)	2.82(0.68)
拒否回避欲求	Mean(SD)	3.54(0.81)	3.78(0.70)	3.16(0.84)	3.37(0.80)

以上より、a. 両面群では両欲求がともに高いこと、b. 表面群では「拒否回避欲求」が高いこと、c. 内面群では「拒否回避欲求」が低いこと、d. 関係回避群では両欲求がともに低いことが明らかになった。「拒否回避欲求」が友人関係に「表面的関係」を含む a. 両面群と b. 表面群で高く、「表面的関係」を含まない c. 内面群で低いというこの結果は、他者からの拒否を恐れる心性が「表面的関係」を促進するとするこれまでの指摘（高垣，1988；上野他，1994）を支持する結果となった。

## (2) 充実感

充実感を測る尺度36項目に対し主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。結果、大野（1984）と同様に4因子構造が妥当であることが確認された。ただし2つ以上の因子に.30以上負荷していた12項目は因子の解釈から除外した。各因子に当てはまる項目も、大野（1984）では第4因子に負荷が高かった「毎日の生活のなかでものをやりとげる喜びがある」が、本研究では第1因子に負荷が高くなったことを除き、各因子に当てはまる項目も一致した（全分散を説明する割合は52.56%）。よって大野（1984）に準拠し、第1因子を「充実感気分・退屈・空虚感因子」（以下「気分因子」と省略して表記）、第2因子を「自立・自信・甘え・自信のなさ因子」（以下「自立・甘え因子」と省略）、第3因子を「連帯・孤立因子」、第4因子を「信頼・時間的展望・不信・時間的展望の拡散因子」（以下「不信因子」と省略）と名づけた。また Cronbach の係数を算出したところ、尺度全体では  $\alpha = .86$ 、「気分因子」では  $\alpha = .89$ 、「自立・甘え因子」では  $\alpha = .81$ 、「連帯・孤立因子」では  $\alpha = .72$ 、「信頼・不信因子」では  $\alpha = .73$  という値が得られ、信頼性も確認された。

次に友人関係の4つの群を独立変数、充実感の各因子を従属変数とした分散分析を行った。その結果、すべての因子に有意な群間差がみられた（気分因子： $F_{(3, 395)} = 3.70, p < .05$ 、自立・甘え因子： $F_{(3, 395)} = 4.57, p < .01$ 、連帯・孤立因子： $F_{(3, 395)} = 9.35, p < .01$ 、信頼・不信因子： $F_{(3, 395)} = 15.52, p < .01$ ）。Table 4 に4群の各得点を示す。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、「気分因子」については c. 内面群 > d. 関係回避群、「自立・甘え因子」については c. 内面群 = a. 両面群 > d. 関係回避群、「連帯・孤立因子」については d. 関係回避群 > a. 両面群, b. 表面群 = d. 関係回避群 > c. 内面群、「信頼・不信因子」については c. 内面群 =

a. 両面群 > b. 表面群 = d. 関係回避群という結果が得られた。

以上より、a. 両面群では「気分因子」と「信頼・不信因子」が高く「連帯・孤立因子」が低いこと、b. 表面群では「連帯・孤立因子」が高く「信頼・不信因子」が低いことが明らかになった。また c. 内面群では「気分因子」と「自立・甘え因子」「信頼・不信因子」が高く「連帯・孤立因子」が低いこと、d. 関係回避群では「連帯・孤立因子」が高く「気分因子」と「自立・甘え因子」「信頼・不信因子」が低いことが明らかになった。c. 内面群においてアイデンティティ統合と関連がある3因子がこのような値をとったことから、この群の青年は充実感を十分に感じており、アイデンティティも統合状態に向かっていると考えられた。反対に b. 表面群と d. 関係回避群においてはこのような傾向はみられず、「内面的関係」が青年に精神的な安定とアイデンティティの統合をもたらすこと（宮下，1995；宮下他，1992）が支持された。

## 考察

1. 「内面的関係」と「表面的関係」からみた友人関係  
本研究では、まず「内面的関係」と「表面的関係」の両関係を同時にとっている青年の有無の検討をした。結果、従来指摘されてきたようなどちらか一方の関係のみをとる青年よりも、両方の関係を同時に成立させている、もしくはどちらも成立させていない青年のほうが多いことが明らかになった。またこのような傾向は特に男子において顕著であることも明らかになった。

## 2. 友人関係の類型ごとの内面的特徴 (1) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

友人関係の違いによる「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」の特徴を検討した結果からは「内面的関係」と「表面的関係」を同時に成立させている青年は両欲求がともに高いということが明らかになった。また他者からの拒否を恐れる心性が「内面的関係」を抑制し、「表面的関係」を促進するという指摘（高垣，1988；上野他，1994）も支持された。

しかしながら、同じように「表面的関係」をとっている b. 表面群の青年と a. 両面群の青年とでは、「表面的関係」が示している内容は違っていると考えられる。つまり「拒否回避欲求」のみが高い b. 表面群の青年は、

Table 4 充実感の平均値と標準偏差

		a. 両面群	b. 表面群	c. 内面群	d. 関係回避群
気分因子	Mean(SD)	3.10(0.38)	3.09(0.35)	3.21(0.30)	3.05(0.35)
自立・甘え因子	Mean(SD)	3.40(0.37)	3.29(0.38)	3.41(0.36)	3.25(0.40)
連帯・孤立因子	Mean(SD)	2.73(1.05)	3.05(0.89)	2.58(0.89)	3.19(0.82)
信頼・不信因子	Mean(SD)	3.87(0.66)	3.51(0.74)	3.91(0.72)	3.33(0.77)

同調的な振る舞いが際立った「表面的関係」をしていると考えられるが、両欲求が高い a. 両面群の青年は、このような同調的な振る舞いに加え、楽しく周囲を盛り上げる振る舞いが際立った「表面的関係」もしていると考えられるのではないだろうか。

さらに菅原（1986）は、両欲求とも公的自意識と正の相関があるため、公的自意識が強ければ一般的に両欲求のいずれもが強い傾向があることを明らかにしている。このような個人の中で「拒否回避欲求」と「賞賛獲得欲求」という正反対の欲求がともに強いという矛盾した状況に対して、菅原（1986）は以下のような可能性を示唆している。つまり両欲求がともに強いという矛盾した状況にある者は、その時々状況や対する相手との関係により、同調的な振る舞いと注目を集めるような振る舞いという2つの自己呈示のストラテジーを使い分けるといって対応している可能性があるという指摘である。

菅原（1986）の示唆のとおり、両欲求が高い a. 両面群の青年は公的自意識も高く、周囲への同調と周囲の注目を集めるという2種類の振る舞いを状況に応じて使い分けられているならば、彼らにとって「内面的関係」もまた使い分けのストラテジーの一種となっている可能性がある。つまり、「拒否回避欲求」と「賞賛獲得欲求」がともに高いことが、状況に応じて振る舞いを使い分けを促進しているとするならば、そのような使い分けの習慣をもつ青年は、「内面的関係」と「表面的関係」という2種類の関係も状況に応じて使い分けられていると考えられる。

また a. 両面群とは反対に d. 関係回避群の青年は「拒否回避欲求」と「賞賛獲得欲求」の両欲求が低かった。両欲求は集団への帰属感とも関連しているため、d. 関係回避群の青年はそもそも友人に対する関心や執着が薄い可能性が考えられる。高垣（1988）は友人からの評価に過敏であることが青年を親密な関係から遠ざける危険性を指摘しているが、反対に関心がなさすぎても友人への帰属感をもつことができず、青年を友人関係そのものから遠ざけてしまう危険性も示唆された。

### （2）充実感

友人関係の違いによる「充実感」の特徴を検討した結果からは、「内面的関係」と「表面的関係」を同時に持っている青年は充実感を十分に感じているということが明らかになった。また「内面的関係」が青年に精神的な安定とアイデンティティの統合をもたらすという指摘（宮下，1995；宮下他，1992）も支持された。「表面的関係」が精神的な安定やアイデンティティの統合にネガティブな影響を与える可能性はないと考えられた。

友人関係に「内面的関係」を含まない b. 表面群と d. 関係回避群では共通して「連帯 - 孤立因子」が高く、「信頼 - 不信因子」が低かった。「連帯 - 孤立因子」は

成人期初期の主題である「親密さ 対 孤立」(Erikson, 1950) に対応する因子である。他者との自己開示をともなった相互作用的なかわり中で獲得されるものである親密性 (Erikson, 1950) は、「充実感」の中でも特に対人関係との関連が強い因子であると考えられる。同様に「信頼 - 不信因子」は乳児期の主題である「信頼 対 不信」に対応する因子であるため、これも「連帯 - 孤立因子」と同様、対人関係との関連が強い因子であると考えられる。よって「内面的関係」を友人関係に含まない b. 表面群と d. 関係回避群において、特にこの2因子が精神的な安定やアイデンティティ統合状態とは逆の結果を示すこととなったのであろう。

さらに d. 関係回避群の青年はこれらの結果に加え、「気分因子」と「自立 - 甘え因子」も低いと、c. 内面群とは正反対の結果を示していた。b. 表面群の青年が c. 内面群や a. 両面群の青年たちほどに「充実感」を感じていないことも、「内面的関係」が青年に精神的な安定やアイデンティティの統合をもたらす、「表面的関係」ではこの役割が果たせないことを示していると考えられる。一方で、友人関係に d. 関係回避群 b. 表面群より顕著に「充実感」を感じていないとするこの結果からは、「内面的関係」と「表面的関係」の両関係を避けてしまうよりは、たとえ希薄であるにしろ友人とかかわっているほうが青年の内面にとって有用であることが示唆された。

### 3. 各群の特徴と今後の課題

本研究より明らかになった「内面的関係」と「表面的関係」の2側面による現代青年の友人関係の特徴を Table 5 に典型的にまとめた。

本研究から、「内面的関係」と「表面的関係」を同時に成立させている青年が一般的に見られることが明らかになった。この結果だけでは、両関係を同時に成立させることが現代青年にとって最も適応的な友人関係であると言い切ることはできない。しかしながら、両関係を同時に成立させている青年は充実感を十分に感じており、「表面的関係」からネガティブな影響のみを受けている可能性は否定された。今後は社会的な適応や発達という視点から研究を行うことで、「内面的関係」と「表面的関係」を同時に成立させることの意義を明らかにできるだろう。

Table 5 「内面的関係」と「表面的関係」の2側面による現代青年の友人関係の類型の特徴

		「表面的関係」	
		High	Low
「内面的関係」	High	<p>a.両面群 (110人)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>。「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」がともに高い</li> <li>・同調的な振る舞いと周囲の注目を集める振る舞いを使い分けながら「表面的関係」を維持</li> <li>・同様に「内面的関係」と「表面的関係」も使い分けしている可能性が示唆</li> <li>。「充実感」も高い</li> <li>・精神的な安定を得ている</li> <li>・アイデンティティが統合状態に向かっている</li> <li>・「表面的関係」からのネガティブな影響はない</li> </ul>	<p>c.内面群 (90人)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>。「拒否回避欲求」が低い</li> <li>・「内面的関係」が抑制され、「表面的関係」が促進されることはない</li> <li>。「充実感」が高い</li> <li>・精神的な安定を得ている</li> <li>・アイデンティティが統合状態に向かっている</li> </ul>
	Low	<p>b.表面群 (81人)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>。「拒否回避欲求」が高い</li> <li>・「内面的関係」が抑制され、「表面的関係」が促進されている</li> <li>・同調的な振る舞いが顕著な「表面的関係」を維持</li> <li>。「充実感」が低い</li> <li>・「内面的関係」がないため、特に連帯や信頼といった対人関係と関連している「充実感」を感じにくい</li> </ul>	<p>d.関係回避群 (110人)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>。「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」がともに低い</li> <li>・友人に対する関心や執着心も低いため、友人関係から遠ざかっている可能性</li> <li>。「充実感」が低い</li> <li>・「内面的関係」がないため、特に連帯や信頼といった対人関係と関連している「充実感」を感じにくい</li> <li>・「表面的関係」がないため、生活感情としての「充実感」も低い</li> </ul>

### 引用文献

E. H. エリクソン 仁科弥生 (訳) 1977 幼児期と社会, 1, 2  
みすず書房。(E. H. Erikson 1950 *CHILDHOOD AND SOCIETY* W.W.Norton & Company)

小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 2, 86-98.

橋本剛 (2000). 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究, 48, 94-102.

廣實裕子 (2003). 現代青年の交友関係から見た自己受容性と社会的スキル 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 52, 305-310.

松井豊 (1990). 友人関係の機能 菊池章夫・斎藤耕二 (編) ハンドブック社会化の心理学 川島書店 pp283-296

宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝 (編) 講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し 青年期 金子書房 pp155-184.

宮下一博・渡辺朝子 (1992). 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要, 40, 107-111

落合良行 (1993). 青年の心理学 有斐閣.

岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.

岡田努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.

岡田努 (2002). 友人関係の現代の特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達の研究 金沢大学文学部論集 行動科学・哲学編, 22, 1-38.

岡田努 (2007). 現代青年の友人関係と自己像・親友像についての発達の研究 金沢大学文学部論集 行動科学・哲学編, 27, 17-34.

大野久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究 教育心理学研究, 32, 100-108.

大野久・茂垣 (若原)まどか・三好昭子・内島香絵 (2004). MIMICモデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討 教育心理学研究, 52, 320-330.

大谷宗啓 (2007). 高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替 教育心理学研究, 55, 480-490.

菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について 心理学研究, 57, 134-140.

高垣一郎 (1988). 自分を作る 心理科学研究会 (編) かたりあう青年心理学 青木書店 Pp. 55-82.

上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.

### 謝辞

本論文は愛知教育大学教育学部に提出した卒業論文 (2006年度) の一部を加筆・修正したものです。  
調査にご協力いただきました学生の皆様、先生方に篤く御礼申し上げます。

(2008年9月17日受理)